

◎2020年6月

◎第1942回 定期公演 Cプログラム

ジャン・シベリウス（1865～1957）の交響詩《フィンランディア》と《交響曲第1番》は、ロマンチックで情熱的。対して、イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971）の《ヴァイオリン協奏曲》はクールで諧謔（かいぎやく）的。作風が全く違うシベリウスとストラヴィンスキーだが、両者とも20世紀半ばにフィンランドのヴィーフリ財団から国際的作曲賞（ヴィーフリ・シベリウス賞）を授与されている。異なる魅力を持つ2人の巨匠の音楽的エッセンスを味わい尽くしたい。

## ■シベリウス

### ■組曲「恋人」作品14（約15分）

シベリウスの《恋人》は、1894年にヘルシンキ大学男声合唱団が企画した作曲コンクールで2等賞を獲得した無伴奏合唱曲である。フィンランドの民族叙情詩『カンテレタル』（1840年に出版されたフィンランド語の叙情詩集）からテキストが採られたこの清冽（せいれつ）な作品は、シベリウスの全合唱曲のなかでも群を抜いて独創的といえよう。

オリジナルの男声合唱版の初演後、シベリウスは同曲を弦楽伴奏付き、混声合唱用、さらには弦楽合奏用に改編している。弦楽合奏への改編は、オリジナル版の作曲からおおよそ20年後の1911年夏から1912年初頭にかけて行われた。当時、創作の円熟期を迎えていたシベリウスは、晦渋（かいじゅう）な《交響曲第4番》（1911）を発表。喉頭腫瘍（こうとうしゅよう）による健康の悪化と莫大（ばくだい）な借金を抱え、著しく内省的な作風へと向かっていた。《恋人》の弦楽合奏版にも、そうした作曲者の孤独な気持ちが反映している。

曲は大きく3つの部分からなり、それぞれ第1曲〈恋人〉、第2曲〈恋人のそぞろ歩き〉、第3曲〈別れ〉の副題が付されている。合唱版のテキストによると、「私の美しい人は今どこにいるのだろうか」と綴（つづ）られる神秘的な第1曲で恋人への憧（あこが）れが奏でられ、リズムカルな第2曲では「私の可愛い人がここを歩いた」と、その面影が夢見心地に語られる。そして哀しみを内にたたえた第3曲では、「さあ抱きしめておくれ、愛しい人よ」と、恋人と楽しく過ごした一時が綴られた後、彼らの切ない別れが描かれている。

作曲年代：[原曲（男声合唱）] 1894年　[男声合唱（弦楽伴奏付版）] 1894年　[混声合唱版] 1898年　[弦楽合奏版] 1911～1912年

初演：[弦楽合奏版] 1912年3月16日、作曲家自身の指揮、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団

（神部 智）